

シンポジウム「災害弱者をどう救うかー外国人への情報提供を考えるー」を開催

●大学院環境学研究科、災害対策室

シンポジウム「災害弱者をどう救うかー外国人への情報提供を考えるー」が、3月18日（土）、環境総合館において、開催されました。

シンポジウムでは、最初のプログラムで「災害時における外国人への情報提供と支援のあり方」を主題に、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震で実際に外国人対応に当たっ



パネルディスカッションの様子

たNPO法人 多文化共生センターの田村太郎氏、長岡市国際交流センターの羽賀友信氏から実態と課題について講演が行われました。

その後のプログラムでは「地震を迎え撃つ東海地域で、私たちが今すべきこと」と題したパネルディスカッションが行われ、英文情報誌「アベニューズ」の佐藤久美氏、財団法人浜松国際交流協会の三池 アリセ ミホ氏、田中京子留学生センター助教授、木村玲欧環境学研究科助手や会場の参加者が加わり、外国人が多い東海地域における課題と備えのあり方が議論されました。

外国人が災害時に意思疎通を図れるよう簡単な日本語を使える支援について、地震への理解を促す支援について、また、地域コミュニティに属さない外国人の救援に必要な精神についてなど、さまざまなテーマで、プログラムの時間を超えて、熱心な議論がされました。

大学院環境学研究科、災害対策室は、今後も各部局や組織と連携してユニークな企画を開催していく予定です。

愛知県教育特区「知の探究コース」初の修了生

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、平成16年度に開始した「あいち・知と技の探究教育特区」と題した、高等学校と大学とをつなぐ試みに、全学に先駆けて協力しました。

「自然の見方を学ぶ」というテーマを掲げ、昨年度は附属地震火山・防災研究センターを中心として、同研究科3専攻の協力の下に、「知の探検講座」（受講者16名）を実施しました。



森部さん（左）と加藤さん（右）の成果発表会の様子

今年度は「知の探究コース」として、千種高校2年加藤慶一さんと明和高校2年森部千絵さんが選抜されました。2人は週1日大学に通い、学習と研究を行いました。まず固体地球物理学の学部生向け講義と実験に参加し、基礎知識を学び、大学の雰囲気を体験しました。さらに、演習や野外実習、観測への参加、担当教員とのディスカッションを通じて学習を深め、研究テーマに取り組みました。

加藤さんは藤井直之同研究科教授、渡辺俊樹同研究科助教授の指導の下、地震時の地殻変動の解析に取り組み、「GPSから求めた2003年十勝沖地震の余効滑り」という研究発表をまとめました。森部さんは「1945年三河地震の被災者へのインタビュー」に取り組み、林 能成同研究科助手、木村玲欧同研究科助手とともに被災者宅を訪れて体験談を聞き、地震災害の記憶を記録として残す作業を行いました。2人は、成果発表会で「学会発表として十分通用する。」と賛辞を得、「週1日分で学校の勉強に追いつくのは大変でしたが、大学でいろいろな知識やものの考え方を学び、楽しかった。また参加したい。」と感想を語りました。先輩との交流もよい経験になったようです。なお、コースの履修時間は高等学校の卒業単位に認定されます。